



春興河本銀金... 左武

Handwritten text on a central paper label, including the characters '地文'.

^13
4439
3



113
4439
3



加之久全傳香籠草卷之三

江東

梅暮里谷峨著



第九 曾平左仲次は巡逢ひ再奸諂とる段

印南曾平の左仲次は、國を立退りしより、己を責め自然と容を
すめ、拔足せりとの意地よく、周州を以余り、梅津とらぬざし
急なるみ、脚氣發りて道よりゆくと、摧く木の根は腰うちりし
休まけしが一位の男、曾平が傍へ近寄り、下官の旅人を脊負て
困倦を休めんを欲いと多きとる。今おん才の光景をみるは足痛
蹴くは、靴は馬は股蓋、駕よ昇きあがり、此く竊屋よの
べりれど、價賤きと言ひて、薦者と思ふよ。徒子六三席、伏見
袖助るは、麻力の足の云ふと、此場とらえとあり、袖助

由様人の何とやん 幼弱くはたさぬゆゑ 笠の中と覗き入るよ。
 由らるるも 曾平とてありはさへ。 这也曾平とてありと
 掛きは曾平由詮とて多く。 袖はみや 汝後願を伴ひ。 大坂は
 住居をせよとて 嘆つるよ。 恙多しや。 それも故ありて 國を去り
 浪々の身のため 由る。 持津國の知音のかえ 行なやと云
 せけはありせよと。 過去らんとて 刀の鏢とて多く。 比身はいさ
 奉りまきりも 大悪無道の左仲次より。 剛く
 種々の失行算れよいと 主家縁家の二つ。 由ん
 牙達の所為る。 せん牙が他人の由あり。 生むべき者よ
 の。 耳のさへ 正しく 主人の片割れへ。
 口よ 味小す。 諫めざるの故 主人當主への



不忠とるまは。途中ゆつとを述説と尤もあつひ思て退け
善よとてひるが黄泉よの方とあまを救ひまらん。掌
と握り諫言ると。曾平ハ此場を言らめ。退んりのと傳り
づる。汝が忠言今とありて。耳よ入まどあひまらん。今浪
浪の牙とありて。是までの積悪むひまると悔まど
詮ると。実しやうは打たれは。旅店へ止宿するまどく。價も
つらまは。如今説く。智喜の方へ急がれ道住所も定り
るべ。訪ひ音耗ん。太坂あての何處よ住やと。居所を奪
ぬ。痛る是由打忘まど。逃ま去り。夜深まは。持律圃へ
立越左仲次が往家へ尋ね行く。互ひまは。同じく
の祝言の夜の始末より。見やくが奸曲も千名まは。櫓尾の

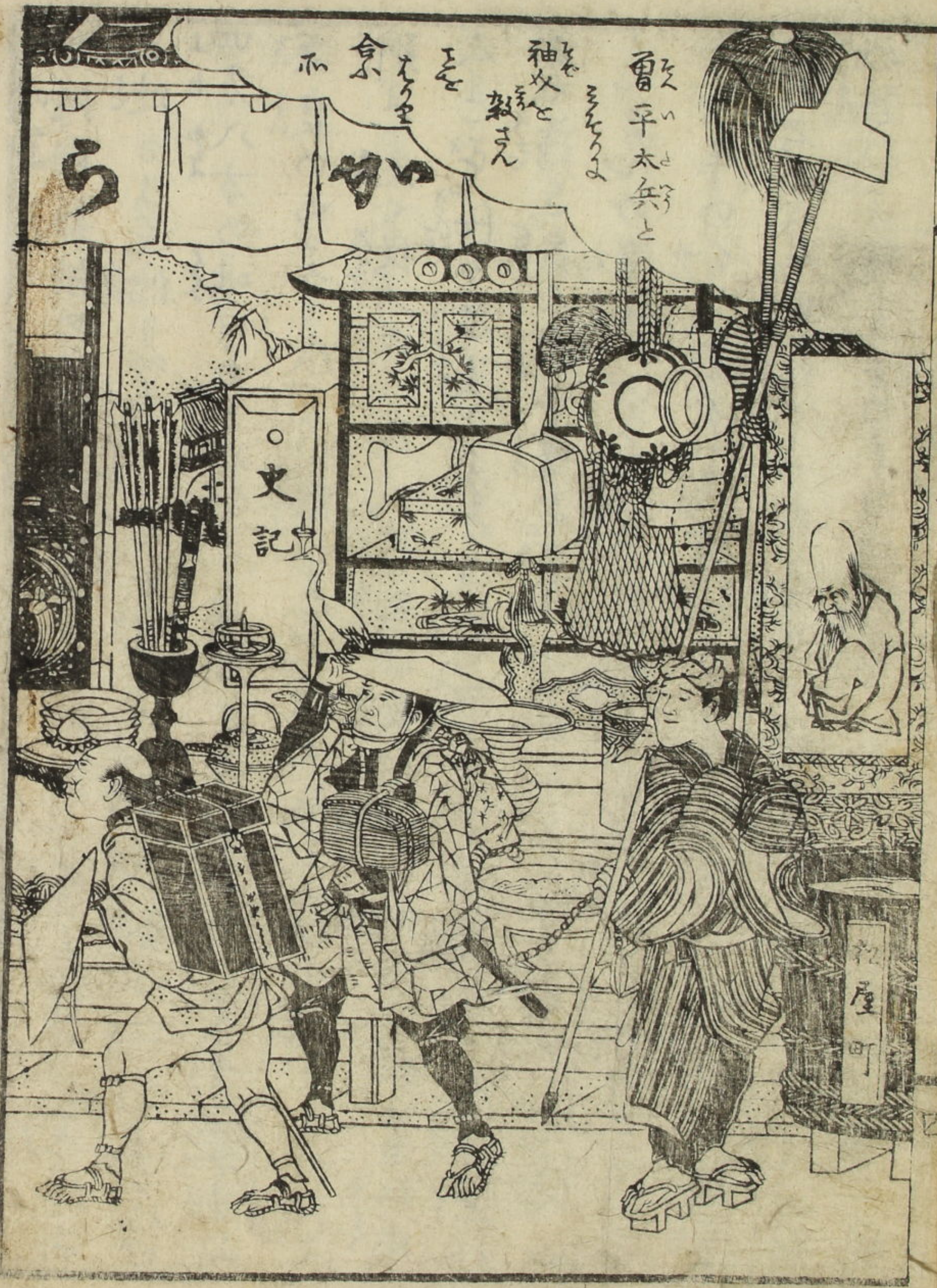
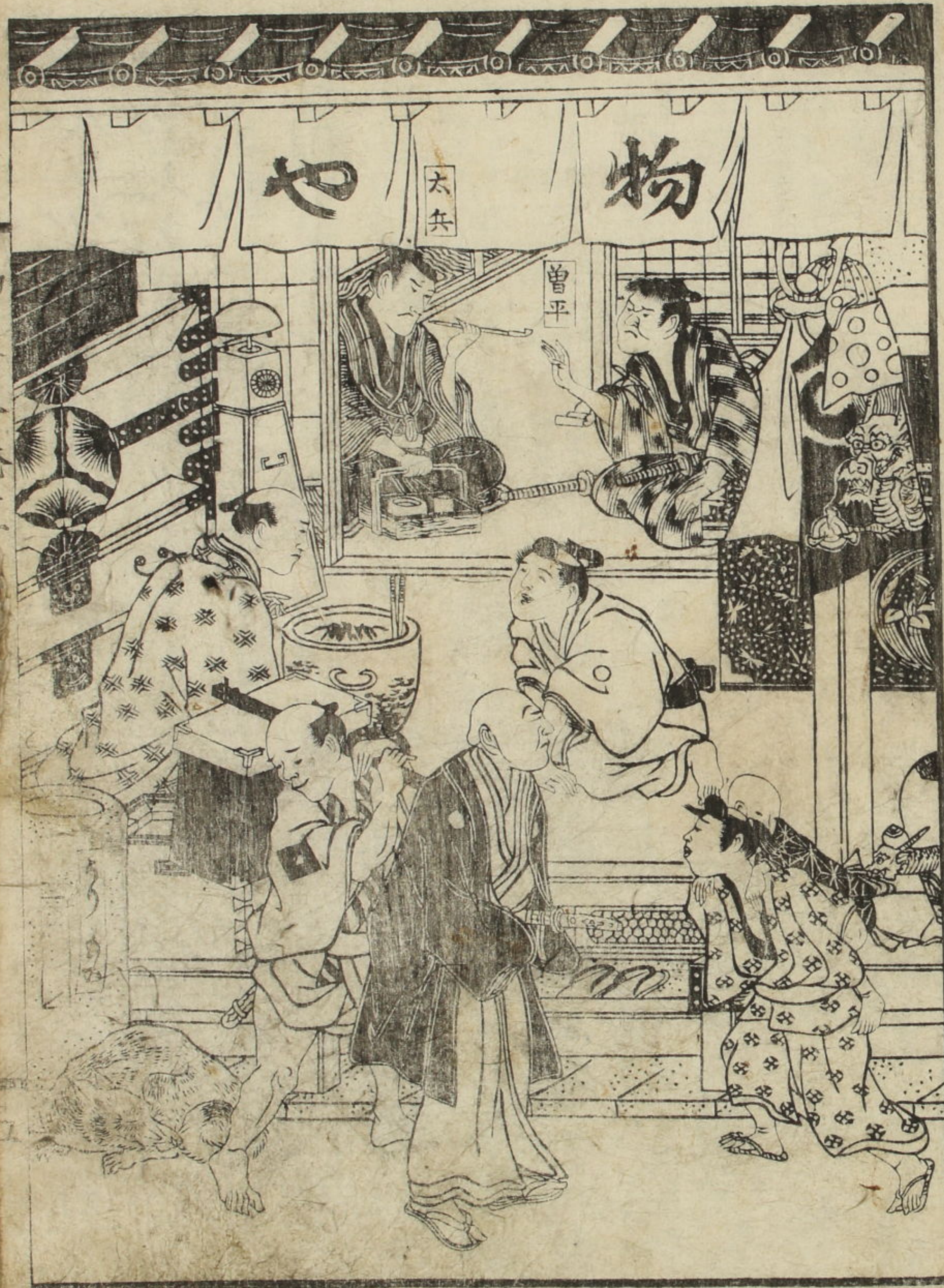
公持し。團又住居が。ハ牙の跡とまは。亡命す。此處へ
来る踏ま。六二郎が保兒袖女よ出合らま。忠義まど。諫
む。ぬく波流一途ま去じが。彼六二郎が初敷二つハ
神硯を捜んりも。ろく。一射彼力量強く。其上武士
の業も嗜める者まは。同團又住居るま。ハ后を抱ま。倒
め。まは。ひと。早く思慮をめぐり。あは。ん。後悔
あるま。詮るま。べく。あ。牙團を立退。跡ま。小園が
殺害ま。ま。のま。太兵と。ま。あ。ん。ま。のま。ま。
ど。六二郎 船越十兵衛。あ。牙の奸計ま。あ。ま。ま。ま。ま。
しも。ま。ハ。硯詮ま。の。團を。追。ま。ま。相公の遠討ま
あ。ま。ま。ま。の。砌。兩位へ。自手一封を。ま。ま。今とありて。

いとしむ。免すれ角すは一族あり。十兵衛のきこひの
人知しむ。失のむんバ枕と高う。藤かう。左仲次も深念は
小可第が名。経紀の道由譲り。精まは。兄の罪隔る。大兵
よ受べさるる。少す。太兵か名。あく罪を遁せんとあ
ど。おん身の發言のどく。彼ホと失らん。あ。袖助をよめと
る。さ。計ふべし。曾平と良低。詰る。いの袖て
あり。後のく。と。読り。あるべし。

第十 袖助腕を折て罪を贖ふ段

翁一女子六三郎が園を退り。後。憑き。源之
一。女小園す。非令の死とえ。活。地。の。袖女
練め。六三郎。よ。逢。と。か。よ。ひ。あ。死。の。身。

つ。津。園。難。波。の。邊。に。住。居。り。袖。助。は。養。老。を。笑。ふ。は。さ
日。迎。も。多。し。沈。む。は。一。日。く。と。さ。り。或。黄。昏。の。寂。莫。し。は
四。方。八。方。の。咄。し。も。と。と。ひ。し。り。も。身。よ。か。る。夏。の。先。達。世
盛。衰。の。あ。る。と。ひ。と。の。諦。む。と。源。之。丞。と。い。ひ。小。園。よ。さ。死。し
別。と。走。て。徒。六。三。郎。の。災。難。を。園。を。退。り。竹。地。に。住。と。行。ぬ
と。是。む。は。忠。美。よ。と。は。を。冬。よ。む。と。寒。う。と。は。夏。来。れ
ど。も。落。さ。れ。よ。暑。と。凄。む。と。さ。る。世。帯。も。あ。る。と。と。く。憂。こ
え。る。ん。の。深。切。の。世。よ。久。報。入。る。と。臣。下。と。の。更。よ。と。は。と
と。両。手。の。金。と。を。決。袖。助。も。あ。ら。左。と。あ。る。と。深。言
と。の。あ。く。と。の。弱。く。と。を。為。る。と。と。詞。と。正。し。く。と。は。は
の。勢。ひ。よ。頷。く。と。の。死。の。為。令。の。つ。か。と。の。と。あ。ひ。と。は



婦人のあん男はあつさるるあつたはとも。高津の住人なる
 中よ。二人とるた舊家の主人。その令国なるあん男のあつたはとも
 あつたはとも。歎きとる等しくと。辱しむるも。あん男のあつたはとも
 るあ。前よの中せしどく。船載十兵傳さまは對面するその時。
 告りあつた。高津家の硯碎けとる偽物なり。実の硯は紛失
 るあつた。相するも深く包む。胡做る左仲次を。あつたはとも。寵愛
 るあつた。遠計も空しく。替婚の夜小園が為は死する。左
 仲次もあつた。太兵衛もあつた。あん男の全うと。亡命する。注
 進あつた。あつたはとも。果しくと。此團は吟呻ひ。硯を賣代る
 せりあつた。あつたはとも。あつたはとも。六三郎はあつたはとも
 の君命。あつたはとも。六三郎のあつたはとも。あつたはとも。あつたはとも

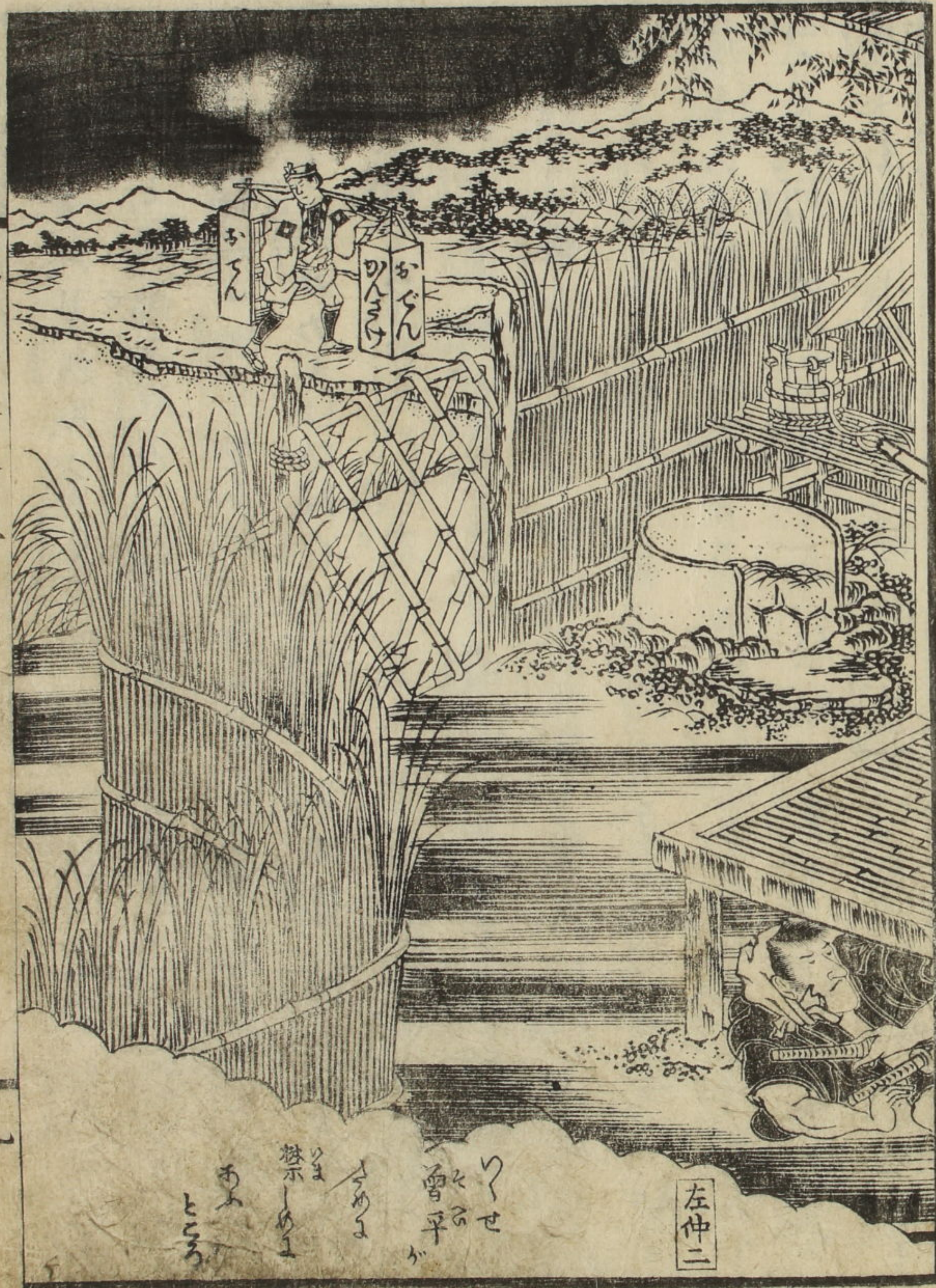
尋ねあつた。あつたはとも。最初あつたはとも。船載さまのあつたはとも。六三郎あつたはとも
 甲新あつたはとも。あつたはとも。硯をさがし得るあつたはとも。あつたはとも。今あつたはとも。あつたはとも
 語る。再び印南のあつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。幸も眼前と。かとはあつたはとも。あつたはとも
 頼もあつたはとも。あつたはとも。顔付して。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも
 殺令硯が別人手。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも
 手あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも
 それあつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも
 の阿女あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも
 者の文通あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも
 とあつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも
 退きあつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも。あつたはとも

早十三支の女子の數。まさるの時ハ抱女は身と賣セ黄金を
 取戻えとねく未練の多しや。先の頃幸便ありて。
 妻より者の覚期の為言送りしが妻あり阿女あり。主人
 の為親のうめ。推辞べきいとまきなり。強くおこなふべしと
 して。余情多し行状を見く。宿め
 早目由西山よかきぬ。今宵由寒き夜よめは。烟酒
 ろどらけ賣く可べし。往來の人の辻占よ手かりの幸と
 待ると。けしき身繕ひしと出行り。糸瀬よりつる
 寂莫く名残ひげは跡見送り。いつ此れよ。志のび居たり
 久印南曾平立出左見右と。糸瀬の不審声と。何
 何れもや人の家よ入りながら。案内もせど。剝布とめし

面を隠さる。胡做るまじと。歴問は回答もなき。糸瀬を突
 倒し乗かて。腰のあより麻繩と出し。高手小手より
 め。布とめし口を割柱へし。鯨く面を包し。布をかき
 捨。や久し。糸瀬。日く袖助と俱し我を誦るよと。其
 其返報あり。方舎より。架居まば。貯りて。かき
 ま。團を退し。時取集持せし。財宝を奪ん為。袖助が物
 と。ちちち居たり。何處に匿しあり。白地よ言ふと。バ
 バ口布もそり。禁め由解らせん。いつあやくと責ぬまば。
 糸瀬。怒り。正し。征人の同胞あり。這遍悪人あり。各
 中。目といつ。恨み。睨め。曾平呵くと笑ひ。めん。各
 故。あ。と。我。と。白眼。ぞ。財宝。と。お。と。え。の。ら。ぬ。

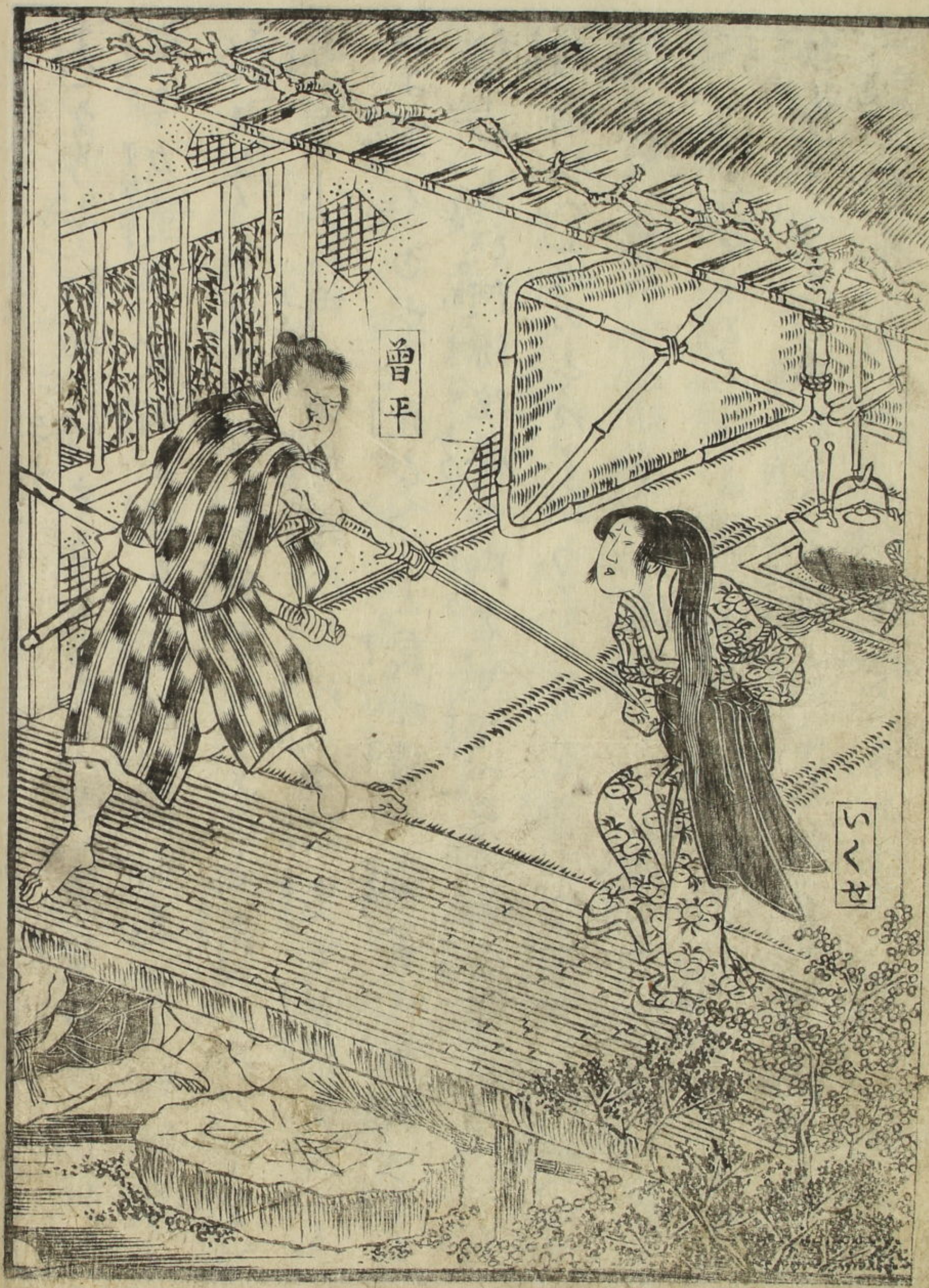
ちのあぐりききバ。殊勝よとて言ふれど言ふはあぐりききバ。
 口布を何ぞか財宝のありや吐べしと荒く罵り
 ちのあぐりききバ。驚く光景もろく。ちのあぐりききバ。
 直るるるるる。いかに西の宮より袖助は巡り逢ひたる
 當下へ先非を悔ひ奉りて歸りし。傷り道もろくも。
 悪報の靚面もろく。斯微運ある妻もろくも。
 其日を送る飯さくも。袖助が情もろくも。野よべさ
 黄金の余情もろくも。ちのあぐりききバ。袖助が留守居合もろくも。
 妻か命へ惜氣もろくも。ちのあぐりききバ。袖助が留守居合もろくも。
 袖助のあぐりききバ。袖助のあぐりききバ。袖助のあぐりききバ。
 ちのあぐりききバ。袖助のあぐりききバ。袖助のあぐりききバ。

ちのあぐりききバ。今袖助が帰宅もろくも。ちのあぐりききバ。
 従令力量あり武術は達とて。敵對のあぐりききバ。袖助もろくも。
 ちのあぐりききバ。此世はありて我身のあぐりききバ。成べりききバ。今宵を
 過さぬと死に兩位の命。死後は他人は財宝を奪はれんもろくも。
 我は繁くあぐりききバ。死にて。良非道の責苦も。兼頼の生る
 ちのあぐりききバ。阿弥陀佛の御名を唱へ。ちのあぐりききバ。合掌もろくも。けれ
 時。袖助の夜のあぐりききバ。常は天あり。孤竹も。今
 宵一夜のあぐりききバ。ちのあぐりききバ。逸早くも。住家へ急ぎ門戸を
 明んとあぐりききバ。ちのあぐりききバ。密に内の光景をさし覗き
 物あぐりききバ。灯火万燈も。何ぞも。ちのあぐりききバ。
 一言の案内も。門の戸踏破り内に入り。果しと。曲者信



左伸二

つせ
曾平
あま
とろ



曾平

あま

加太巻三

者といふは見極めたる先は、我瀬が形勢をえり。禁を引さ
 らどんと。我瀬が片方へ行んとす。曾平の声はさうけい。真
 去つた袖は切りかた。一目にさう。曾平はさう。是非
 るに、無刀のけいひ。白刃の尖さ太刀風。あさひうねく引
 らし。眩をさす。何處よりさあさる。袖助が左の耳へ
 小柄の半裏剣。さう。透逸ども。抜さう。非間あはれ
 ば、さう。働く勇気の袖助。さう。曾平をさう。縁へ
 唾と打つ。縁の下家。忍び居る。左仲次。袖助
 痛手のよりと。曾平の服肚ごと。割。実落所。さ
 めん。阿といひ。死さう。袖助は曾平。目もさう。く
 耳。まさう。小柄とぬさ。我瀬が禁を引さう。又由手と足

諫めんと。曾平が片方へさう。身動もさう。不審押動
 え。息絶。手足も冷さう。駭さ。当惑の光景。鯨く
 諸肌ぬさ。曾平が刀。あけ。腹へ刺んと。我瀬と袖
 助が手。さう。時計。さう。早過。袖助
 と。声を掛け。さう。高津家の智者と呼さう。船載
 十兵衛。さう。袖助。困僕。さう。曾平の仕。主の片刻
 夫故。さう。自殺。さう。武家。さう。比さ。若多。さ
 天晴の。我若。さう。賞。さう。詞。耳。さう。光景。さう。え。さ
 不審。さう。袖助が耳。さう。鮮血。滴。さう。え。さ。耳
 受。さう。瘋故。さう。聾。さう。早くも。悟。さう。袖助が前へ。坐。さ。袖
 助。死。さう。其身。さう。各。借。さう。と。さ。へ。さ。便。さ。さ

主母を跡に残し何人をも死なせ抱き置るや。主は等しき者を
害し。全き主を人殺し重罪とせよ。おつるは。閑僕を
殺し善人を助る。天の道のそと。主人の危急余所よ
んや。あぶら。曾平を殺害する。忠義ある。女は。非
や。腕の所為なり。指を切り。書付。入れ。袖衣
の死のや。生の。死を。惜り。仮初。主人の連枝
討つ。這。腕。手。成。敗。建。投。左。利
腕。ひ。志。折。十。兵。衛。実。と。感。激。
硯。紙。へ。筆。を。書。く。慚。徳。を。知。る。女。の。心。を。あ。ら。わ。す。
曾平を殺す。袖助の名を今より改め忠義は折る腕と云
字を異名とする。腕の義三郎と名乗。よく郭へ入る。て。

硯の詮。義。由。る。と。の。書。面。を。録。め。再。添。る。以。前。の。小。柄
と。十。兵。衛。が。手。に。渡。し。つ。ぐ。と。定。め。ぬ。と。騷。動。の。そ。の。と。り。う。ら
う。け。う。ら。の。小。柄。手。か。う。あ。も。と。言。い。れ。ば。十。兵。衛。の。熟。覧。し。く。
その相。より。左。仲。次。へ。あ。り。う。る。小。鍛。冶。の。う。ら。う。る。小。刀。
細。紙。と。首。傾。け。考。へ。眼。を。め。つ。と。あ。ら。わ。れ。ば。お。ま。さ。う。
袖助の。手。く。も。惜。り。下。家。を。さ。る。人。気。多。鮮。血。滴。り。あ。ら。
告。げ。ま。い。左。を。と。く。曾。平。が。骸。を。引。起。こ。す。果。し。く。服。肚。に。刀
み。と。刺。す。疵。あり。と。言。て。あ。ま。え。す。け。し。べ。跡。あ。く。書。付。え
ん。と。い。ふ。袖。助。が。投。言。へ。仮。初。の。さ。し。く。曾。平。を。殺。す。
刀。の。僕。部。左。仲。次。志。が。く。小。柄。の。在。下。か。方。は。田。お。く。べ。六。三
郎。が。行。傍。神。硯。の。在。所。密。に。商。め。る。と。言。傳。へ。ま。い。

硯の詮

六三

と再會を約し。十兵衛ハ別れり。

第十一 風太矢又身をすまざる段

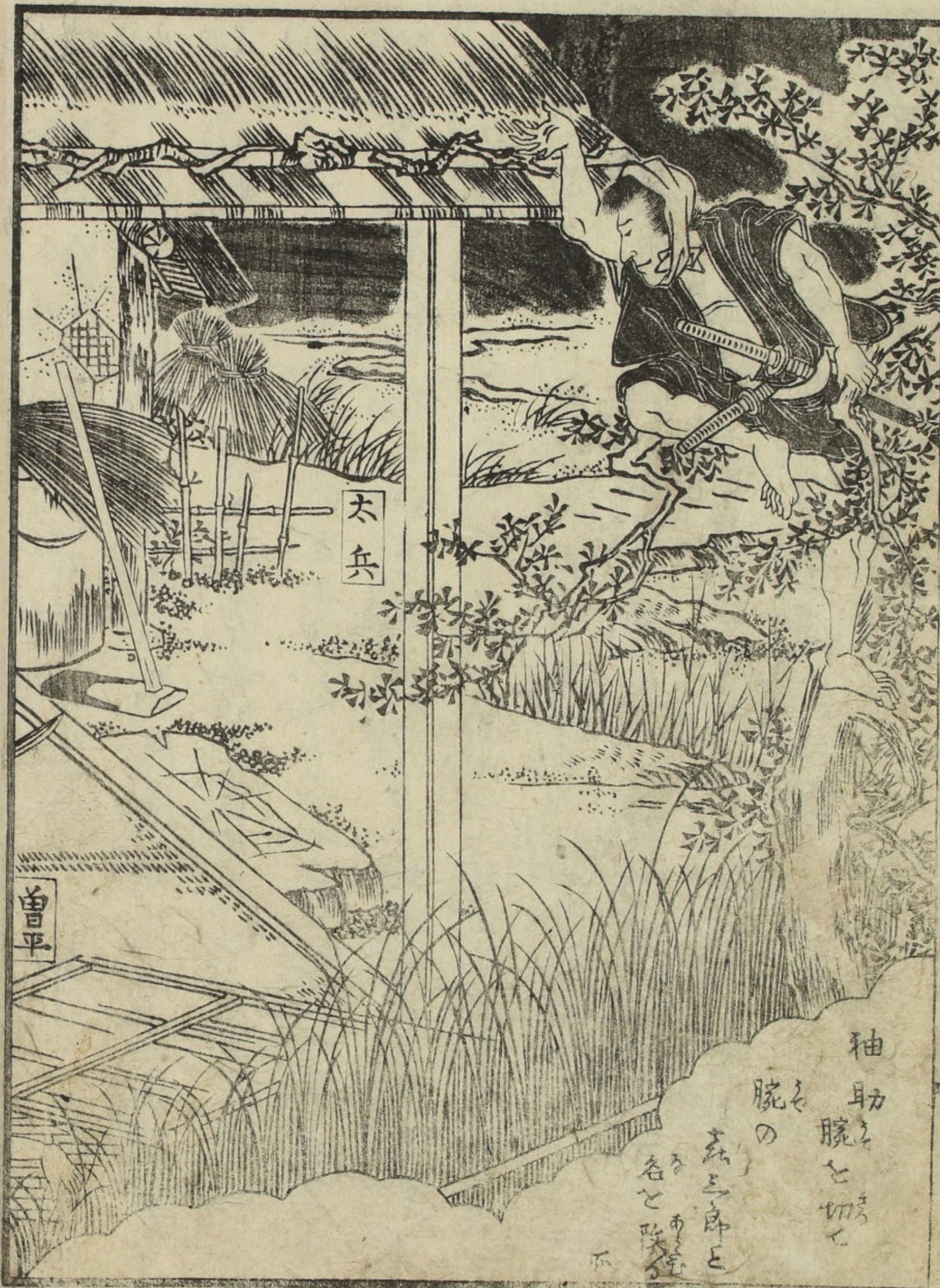
袖助ハ妻風ハ夫の苗守をすめり。幼子阿女小雪ハあがりて。夫の方りの些かさ貰を受細き烟ゆりりるに操正ハ憂世をもぐる。又小雪ハ三丈あくと父と隔り。一ツり二ツ越る年ハ後ハ幼子の幼子も父ハあうても見どあぐ。余ハの子もあれ親子中。身ハ故と世ハ恨之。十一歳の春の頃母の前へ手をつく。あや母上ハあぐ父上のありあがり。親子の名案ハさう並く。顔は志ハぬ。縁ハ何ハ因縁も侍人と思ハバ。結縁ハ前世未來の順礼の身とも多り。円通社佛の結縁ハ前世未來の罪を清一ニツハ。父上の在國へ尋ね納。さう久ハ親子

の名案ハあぐ。縦令との月ハ育るとも。父上の母上ハ淋々。此ハ別れをせりて。連。願ふは父母と宜とハあひあがり。業あがり身といひ。殊更美月よれ女子もれば。拐掣人のつぐえり連れり。戯女ともある。あぐ。あぐ。妻ハ落度よりその悲しみのつらさ。その根と父上の望もあぐ。さうあぐ。折らそわんと宿む。日頃とえり音耗る。月夜ハ吟み。主人の家も。不吉を告り。あやハ人傳をり。訪。主人の家も。主後。安さ。小雪も涙よ。逢へ。幸由た。

此身このみの久ながき何なにとせんと父ちちとるる幼わかなり。外面そとを見みて
涙なみだせしむ入い相あ言いる遠えん寺じの鐘かね。右みぎは幽うすく左ひだりは
の著きく声こゑ。卧ふしと枕まくらはあけ家いへも積つりくく乱みだる。位ゐて由よしひ
と色いろやうに侯うの水みづはあけ流ながし。昨きのう目めゆらり竟つひあけ目め二に目め
るてより。女子むすめの業わざのるるを母ははへ願ねがひて琵琶びわ彈ひ
るよ力をちからを行いく。一ひと夕ゆふと習ならひ行いく。一ひと公こうの處ところ所ところより
其道そのみちは喻たとへ通とす。三さんさそあも匂におぎるよ半なか熟じやくし朝あさな夕ゆふも
急いそぎる。琵琶びわ撥はるる人ひとと母ははの公こうあけ只ただえ糸いとの哀あはれ
るんお母ははゆよ。十じゆきせの久ながも二にッ三さんッ。花はなも羞はづらふ面おも執と
の春はる待まちがけの去こ冬ふゆの梅うめ。苔こけあもまぶ至いたるぬ身みと目め言いと
るんく一ひと生せいと。不ふ盛せいしらら便びんるると死し歎なげき。さうり

裸はだかりぬる。先まづの頃ころ夫おとこの便びん置ざの其その時ときは。高たか津つ家けの奇き石いし
失しひしより。主しゆ家け亡なび。詮せん美みの為ため。揚やう津つ國くに難なん波はは住すま居ゐる
し。小こ雪ゆきが美み目めふ死しと便びんと小こ言いをり置おたは。まらうのとなり
主人しゆじんの思おもを報はりぬりぬるときも。其その娘むすめ目め言いとる
すも。忠ちゆう美みの綱つなも切きと果はん。数かずるるぬる身みも面おも執と由よし
その候さうは。かきくが年としのほるとやん。みのあるる。死して
の用もちも立たまん。賣ばいひ病やまの司つかさどり。耕かと田で地ぢも小こ作しやく也なり。
露つゆの命いのちもはるぬ。松まつ國くにと放はなと主しゆと持もち行ゆく。憂うれひ苦く勞らう
と夫おとこのるよ愁うれひはるぬ。外との方かたは音ね耗へうれぬ
あり。とせ。又また由よし夫おとこの幸さい便びんふりやと。半なかより。ち。ま。ま。由よし
る。むらり。よ。ま。ま。と。ま。ま。く。く。深ふかき橋はし登のぼり。面おもを

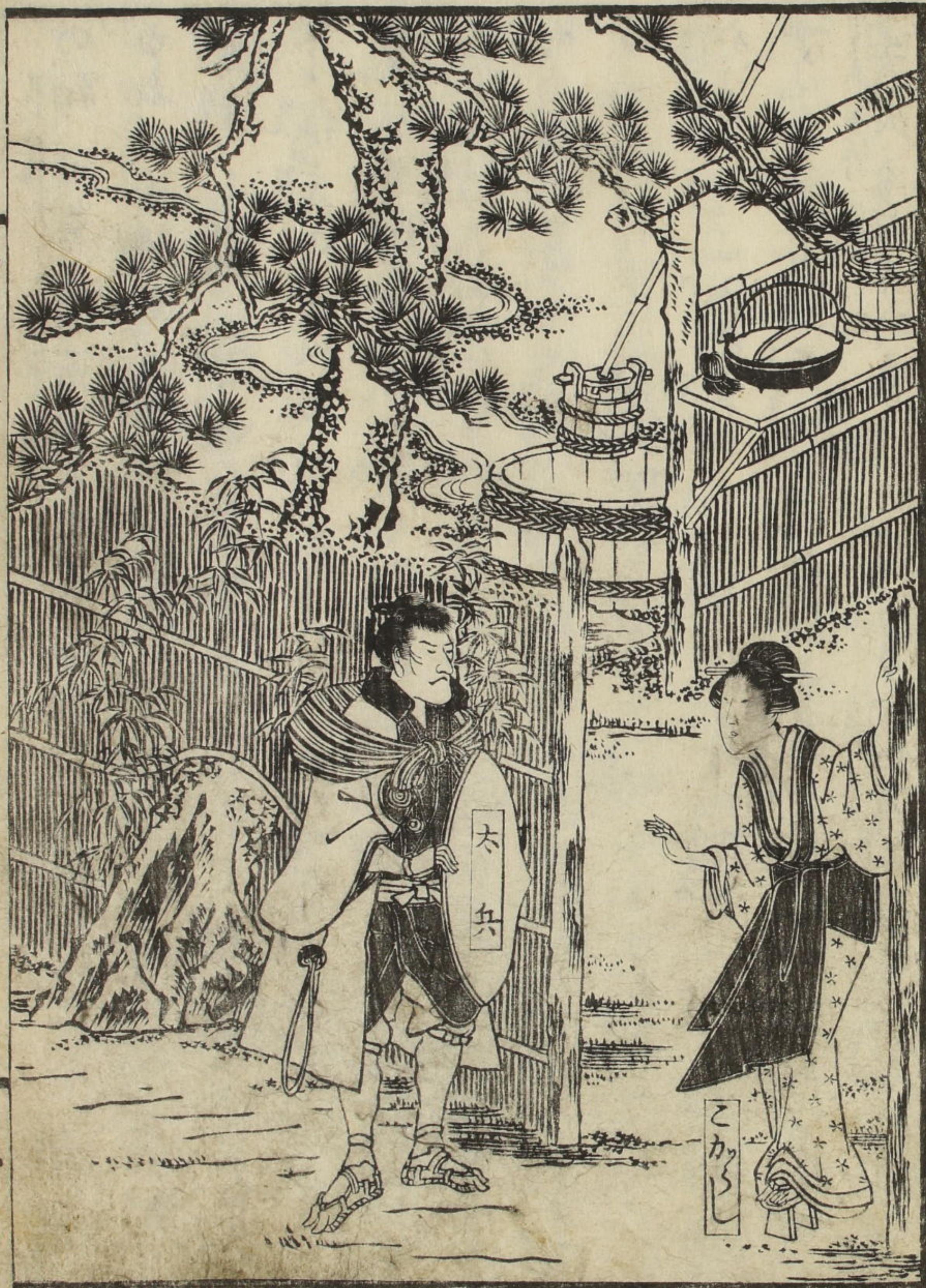
如文火卷三



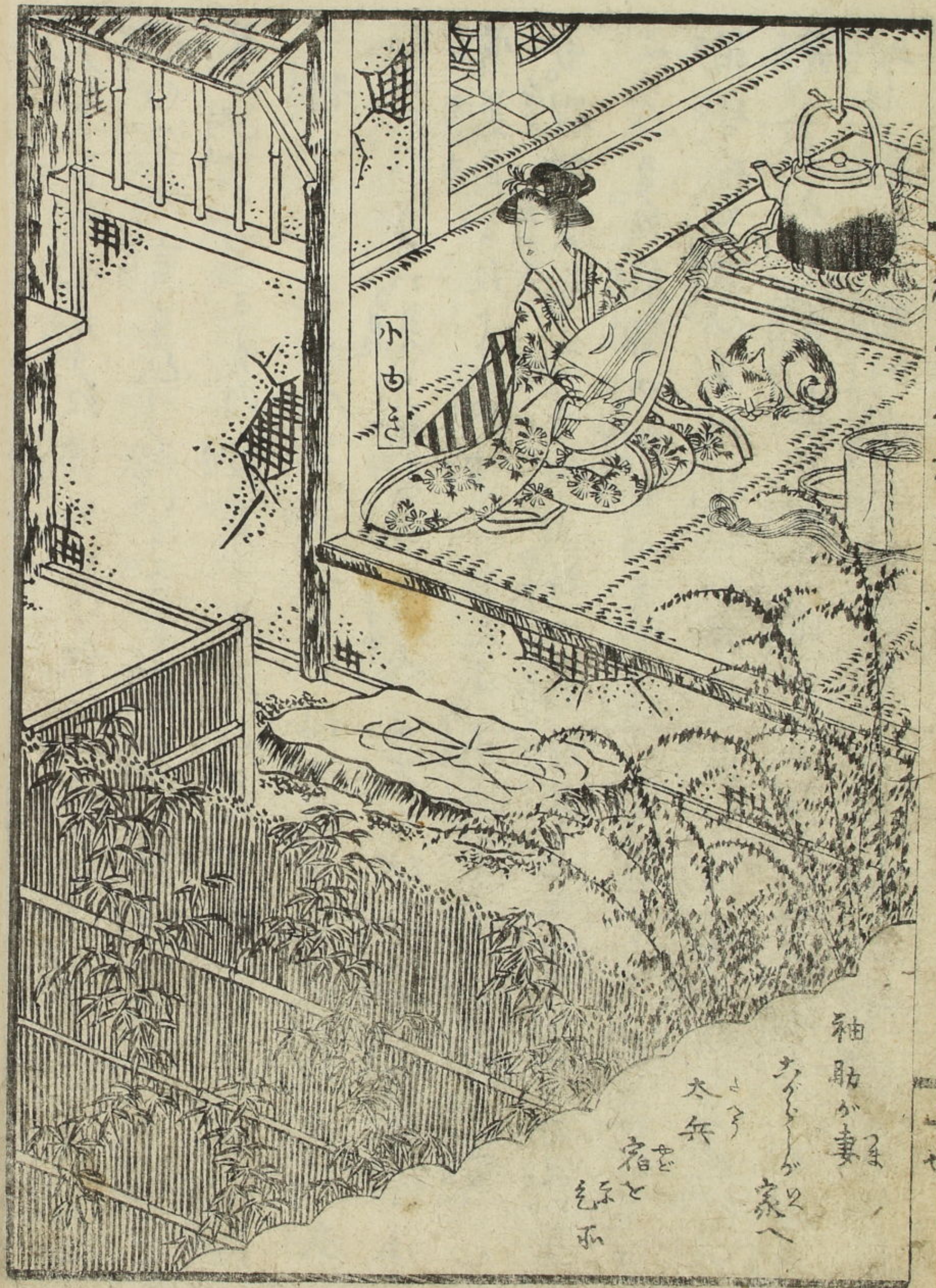
袖助
腕を切て
腕の
各と改て

おん身ハ揚付國ニ住居せらる。雜畧屋太兵の一子太二
 の御ふりありざるやと問ひはる。佐仲次不審。おひめは
 よ。さてハ弟太二郎襤褸の中より。雜畧屋太兵方へ娘子
 あり。その物の奶とするもの。當國山口のものと交つたか。
 彼が阿女ありや。よは僥倖と偽り言ひ。在下幼名を太二
 としひく。雜畧屋太兵の養子とする。又身退り。後ハ
 太兵と名乗りしが。おん身ハ竹人あり。若くハ當國山口の
 奶この阿女ありあり。左よ侍るる。まづ此方へいざせ
 る。いとと伴ひ入り。上坐する奴。泰くく恙多れを祝
 こころをとおん身の乳兄弟。守り育て。奶と濱路ハ阿女
 困る。山口より此小濱へ嫁し。いまハ一女も殺けり。余人

小あは。夫の苗守止めまねよ。仮し由同胞の名遁ま
 りれば。止宿せし。此の難う結ん。鬼まれく。一夜の
 勞も休めぬ。太兵偽の涙をら。何よまね母乃
 名の尊く。今宵の難由乳母の縁あは。軒の端も
 臥さ。嬉し。この國の名乃往昔を。あひ合。羊摩乳
 足摩乳の女。福田媛。八岐の大蛇。逐。山中。進。時
 母。緒。後。是。女。顧。曰。母。未。母。未。と。呼。ば。故。又。母。未。の
 國と号く。後。又。伯。耆。の。字。を。改。め。用。也。これ。二。昔。余。の。星
 霜。を。経。ると。い。ふ。由。乳。母。を。あ。ひ。愛。慕。す。ぬ。日。も。多。く。母。乃
 名。ハ。あり。る。が。人。の。母。の。母。未。す。せ。と。呼。ぶ。れ。ど。天。由。慕。し
 ぬ。感。應。あり。て。也。自然。と。あり。る。母。の。國。の。縁。



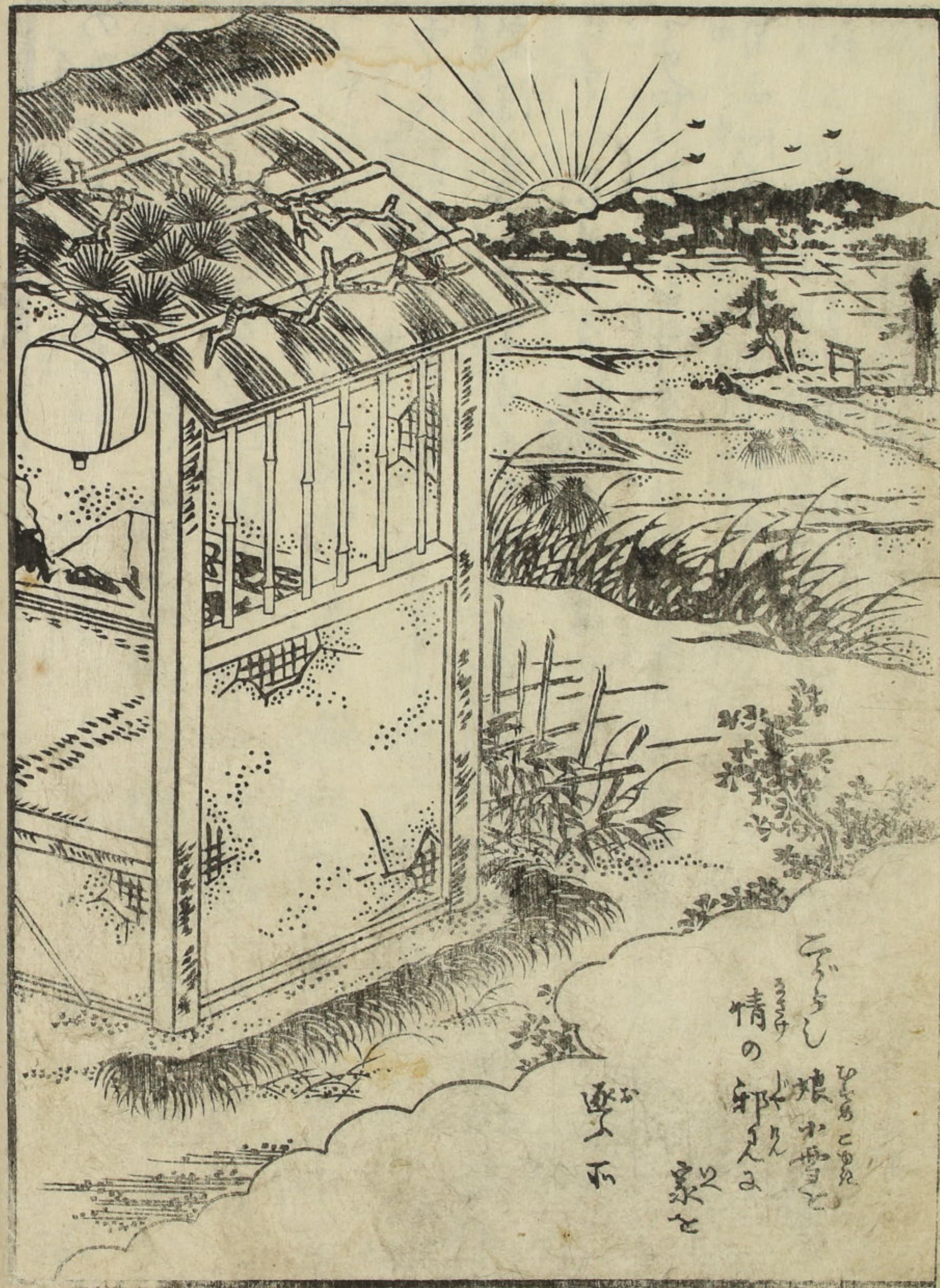
口
大
兵
三



小
舟
三

袖
助
が
妻
と
大
兵
と
宿
と
気
取
と
家
へ

三
七



かよ久巻三

こころし
 娘の情
 情の郷
 人よ
 愛さ

又用^{もち}ごてよ。かま^{かま}りげ人^{ひと}よ発^{はつ}受^うん^んま^まは^はま^ま。り^り由^ゆ首^{くび}悪^{あく}の眼^めよ
 ぞ^ぞん^んん^ん。奉^{ほう}ま^ま換^かる^る宝^{たから}る^る。怪^け瑕^があ^あや^やす^すち^ちの^のま^ま死^しう^うち^ちよ^よ渡^わ
 て^て難^{なん}と^と退^{たい}色^{しき}よ^よや。兩^{りゆう}風^{ふう}よ^よ強^{つよ}く^くあ^あら^ら。持^ぢ病^{びょう}の^の虫^{むし}の^のお^おう^うぬ
 前^{まへ}ふ^ふら^らら^らら^ら。此^{こゝ}丸^{まる}薬^{やく}と^と忘^{わす}れ^れと^と飲^のむ^む。無^なり^りの^の身^みと^とり^りち^ち先^ま
 と^と急^{いそ}く^く知^ちら^ら。本^{ほん}の^の根^ね岩^い石^{せき}よ^よつ^つま^まぐ^ぐま^ま。怪^け瑕^がせ^せる^るや^やと^と二^に品^{ひん}
 と^と小^{せう}雪^{せつ}が^が年^{ねん}よ^よ持^ぢと^とま^まバ^バ恨^{うら}め^め一^{いっ}気^きよ^よ投^な出^だし^し。取^とり^りも^も子^こす^すの
 あ^あら^らざる^る身^みよ^よら^ら。黄^{わう}金^{きん}と^と受^うる^るの^のら^らと^と生^なる^る。死^しん^んと^と生^なん^んと^と他^た
 人^{ひと}の^のう^うら^らひ^ひの^のま^まと^とさ^さら^らう^うと^と。本^{ほん}の^の根^ね岩^い石^{せき}よ^よ杯^{はい}つ^つま^まぐ^ぐま^まら^らく。
 死^しる^るが^が此^{こゝ}悲^{かな}し^しい^いら^らう^うん^んと^と。声^{こゑ}と^とも^もせ^せく^く良^ら歎^{なげ}ま^まと^とひ
 直^ち一^{いっ}飢^う逆^{さか}位^ゐし^しと^と却^{かえ}あ^あが^がり^り。衣^{ころも}の^の塵^{ちり}と^と打^{うち}ち^ちり^りひ^ひ。尻^{しり}身^みし^し
 脊^せ負^おふ^ふ毘^ひ垂^ちの^の袋^{ふくろ}の^の紐^{ひも}と^と志^し免^{めん}。魂^{たま}緒^おと^とた^たの^のま^まと^とさ^さら^らう^う。竹^{たけ}



杖のさくくくも虫の如く母の風を吹かげ見ゆまて見送り
て。言のぬ名残の螢火の如し。やよ小雪さそふ邪見非道の
母ありと。縁故をたねが恨んが先の便りよつが夫より。
言送りう神石をさうさうも太兵のぬの所おるをば
歎きよ近き其人と云量まども乳の縁を幸と道るも
ぬ主ある身あり。色で仕うけくやとくと奪ひ取りぬ
鬼人の心。さうさうもあそりく。夫の為よ身は汚穢
せど。ゆき貞女の其列も加らん。と。叶葉の吹げくよ
中ん死。此身とあふ。おれが。音月もえよ。溢阻もは死。と
恨と。言。親の心意と子のあつて。癡人の子あど最愛と
はる深きと。さうのあつてもらふまて。片時側とをま

さぬよ。様一指とく切らる。今死ぬるうらあけまば。
父母よ別る當惑よ。あやまちもあらん。と。それとて身と
疎せく。邪見非道も。思愛う。親子一世の名残さへ
堪納るさぬ。縁よ一のま。為やと。溢る涙。尽せぬ
言。髪刺を手よりらる。阿弥陀仏を口よ唱へ胸え
ろろげ。咽えと搔らる。あえろく息ハ絶てり。太へ
夜ゆも。明も。れ。臥房を立出。この形勢をえ
大發さ。け。下。狼狽あつ。ろ。下。為と疑。えん。由。危。と
風が死骸よ目よ。あ。埴と。飛。び。埃。を。越。て。迹。去。り。る。

加之久全傳香篋州卷之三畢

